

大同のころには御寶とも名付給ひて

夏井 高人

1 はじめに

長生蘭は、日本が誇る石斛の園芸品種だ。現在流通している多数の長生蘭品種中には比較的最近になって人工交配等によって作出されたものがあり、日本のセッコク (*Dendrobium moniliforme*) とは異なるラン科植物との人工交配実生選抜品もある¹。しかし、古くから栽培され伝承されてきた長生蘭品種の中にはその栽培記録が江戸時代に遡るものがある。

長生蘭は、「長生草 (長生艸)」という古名で呼ばれることもある。そして、長生蘭愛好家であれば、その名を冠した書籍『長生草』を知らない者はいない²。『長生草』は、摂津国細川村の群芳園々主が著したもので、平安秋尾亭蒼山による美しい図版が付されている³。

『長生草』の冒頭には天保5年甲子春3月の日付のある序文があり、それに続いて「附言」なる文が付されている。この「附言」には、「長生草はおく山の巖がねに生ひて神代よりめで給ひしに也 かしこくも少名彦の御薬と名に負 大同のころには御寶とも名付給ひていともいともたふとき草になん もとより其効能は本草綱目にみえたる也 又小盆にうえて目をなぐさめ精気を養わこといふもさらなり 其花は三年経し茎より咲出し蘭の薫りにもまされり」とのくだりがある。これを意識すると、「長生草は、奥山の岩場に生えるもので、神代から珍重されていたものである。かしこくも少名彦の御薬との名が付され、大同の頃には御寶 (みたから) と名づけられた極めて尊い草である。もとよりその効能は本草綱目に書かれている。また、小さな盆に植えて

目を慰め、精気を養うことができることは言うまでもない。その花は、3年を経た茎から咲き出し、恵蘭の香りにも勝るものである」という感じになるだろう。

この「大同のころには御寶とも名付給ひて」の典拠は『長生草』の中にあり、「和名」の条に長生草の古名として次のような記述がある。

すくなひこのくす里 大同類聚方
みたから 大同類聚方

すなわち、『大同類聚方』に「みたから」とあるのを「御寶」と解し、古代より貴重な神薬として尊重されてきたものだということを示す趣旨と思われる。

しかしながら、『長生草』の著者がどのようにして『大同類聚方』を読むことができたのかについては、若干検討の余地がある。なぜなら、『大同類聚方』は、非常に古い文献であり、写本を含めその実物を読むことのできた者が（少なくとも後述の武藤吉得による翻刻版が刊行されるまでは）非常に限られていたからだ。

2 『大同類聚方』の成立と偽書説

延暦 25 年（806 年）に崩御した桓武天皇は、右大臣神王に対し、古来より伝わる薬方を選集すべきことを遺命したが、その神王も間もなく亡くなったため、平城天皇により改めて古伝薬方の選集が命ぜられた。この命に基づき編纂されたのが『大同類聚方』であり、完成した『大同類聚方』は、大同 3 年（808 年）5 月 3 日に上奏された⁴。

『大同類聚方』の原本は現存しておらず、その写本等が伝えられてきたのだが、本居宣長の弟子佐藤方定は用語例の誤り等を指摘して、当時伝えられていた『大同類聚方』が偽書であるとの説

を唱えた⁵。爾来、『大同類聚方』が偽書であるとの説が通説となった。

しかし、そのような学術上の議論とは無関係に、文政 11 年（1828 年）には武藤吉得の翻刻版が出版され、広く流布されていたとのことだ⁶。また、偽書説の元祖として知られる佐藤方定は、偽書説を明らかにした後に発見した『大同類聚方（寮本別名延喜本）』を偽書ではない真本と認め、これに校訂を加えて『勅撰真本大同類聚方』（1856～1864・未完）⁷を刊行した。この『勅撰真本大同類聚方』も広く読まれていたと推定される。

しかし、刊行時期から推定すると、天保 6 年（1835 年・序文の日付は天保 5 年 3 月）に刊行されたとされる『長生草』の著者は、文政 11 年（1828 年）に刊行された武藤吉得の翻刻版を読み、「附言」にある「大同のころには御寶とも名付給ひて」とのくだりを書き、古名の典拠を『大同類聚方』に求めることができたのではないかと思われる。

このような次第で、現在でもなお『大同類聚方』を偽書と信じる向きが決して少なくないのだが、大神神社史料編集委員会監修『校注大同類聚方』及び楨佐知子『全訳精解大同類聚方』⁸が刊行された後は、偽書ではないとの見解が通説になっている。

そこで、これら信頼できる書籍に収録されているものをもとに、『大同類聚方』中にある長生蘭の古名を探してみることにした。

3 『大同類聚方』にある「みたから」の記述

『大同類聚方』卷之一（用薬類之部・山草部）には次のような記述がある（□は欠字部分⁹）。

美多加良 一名以波久須利 味□□□□採□□□□□日爾□
□□国爾多久出

欠字が多すぎるが、少なくとも、石斛のことを「美多加良（みたから）」と呼んでいたことは確実と思われる。

では、何故に石斛が「御寶（みたから）」であったのかについては、様々なことを想像できるが、決め手はない。

ただ、相前後して生じた歴史上の出来事と「出雲（伊豆母）」と「伊豆」との関連性について考えてみると、古代氏族の盛衰のようなものがその背後の事情としてあったと想像してもそう突飛なものではないのではないかと思える。

[注記]

¹ セッコク (*Dendrobium moniliforme*) と高貴石斛 (*Dendrobium nobile*) との交配品または自然交雑由来品がかなり多数ある。石井勇義著・牧野富太郎校訂『増訂改版原色・園藝植物圖譜・下巻』(誠文堂新光社, 1940年) 1003頁にある石斛及び長生蘭のカラー写真図版は、セッコクとデンドロビウム・ノビルの交配種の外形的特徴を顕著に示しているように思われる。そして、同書 1002頁には「明治15年前後より相當に流行したやうである」との説明記載があるから、そのころ以前に人工交配が試みられていた可能性を否定することができないが、例えば、著名な交配種デンドロビウム・カシオープ (*Dendrobium Cassiope*) が RHS 登録されたのが 1890年 (明治23年) であることは「セッコクのプライマリー交配品種 (その2)」らん・ゆり 434号8頁で書いたとおりなので、英国などで作出・RHS 登録されたデンドロビウム交配品が日本国に輸入されたのはおそらく明治時代後期になってからだと推定すべきだろう。ただし、もともと自然交雑種であったものや中国で交配されたものなどが江戸時代～明治時代のころに海路輸入された可能性は残る。

² もと伊藤篤太郎氏が所蔵していた『長生草』が国立国会図書館に収蔵されている。この『長生草』は、国立国会図書館デジタル

化資料の一部として、インターネット上で公開されており、国会図書館のNDLサーチによって探すことができ、また、そのデジタルコピー(PDF)をダウンロードにより入手することもできる。

³ 2013年7月30日～同年9月1日に開催された江戸東京博物館開館20周年記念特別展「花開く江戸の園芸」の展示会場では『長生草』の実物が展示された。

⁴ 大神神社史料編集委員会監修『校注大同類聚方』(平凡社, 1979年) 解題1頁, 榎佐知子『『大同類聚方』考』6頁・同『全訳精解大同類聚方[上]用薬部』(平凡社, 1985) 所収, 伊田喜光・根本幸夫監修『【新版】古代出雲の薬草文化―見直される出雲薬と和方』(出帆新社, 2013年) 161頁以下。

⁵ 佐藤方定の偽書説及びその後の変説については, 前掲『【新版】古代出雲の薬草文化』178頁以下が詳しい。

⁶ 前掲榎佐知子『『大同類聚方』考』9頁

⁷ 前掲『【新版】古代出雲の薬草文化』181頁以下

⁸ 脚注4参照

⁹ 大神神社史料編集委員会監修『校注大同類聚方』と榎佐知子『全訳精解大同類聚方』とでは欠字の数の解釈が異なるが, 便宜, 後者に拠ることにした。欠字の数を正確に確定することは非常に困難と思われるが, 仮に確定することができたとすれば, 字数から推定して内容を一部復元することは可能ではないかと思われる。例えば、『神農本草』には「味」に続けて「甘平生山谷」とあるので, 同じ文字が記載されていた可能性がある。また, 『畫本野山草』には「採」のところに「七月八月採」とあるので, 同じような意味の文言が書かれていた可能性がある。ちなみに, その前の部分は「在山谷中五月生苗茎以竹節節間出碎葉七月花開十月結實其根細長黄色」となっている。